

だれかの笑顔のために

修学旅行に向けて～平和について考える～

今年、終戦から80年になります。広島に原爆が投下された三日後の昭和20（1945）年8月9日午前11時02分、長崎では地上500メートルの上空で原子爆弾が炸裂し、一瞬にして七万人あまりの尊い命が失われました。人としての幸福や生きる権利を無理矢理奪われたのです。まさしく「戦争以上の人権侵害はない」のです。過去の過ちを二度と繰り返さぬために、長崎への修学旅行を「平和」について考える機会としてほしいと考えています。

長崎の平和公園の少し北に故永井隆博士の住まいであった「如己堂」があります。「己の如く人を愛せよ」という言葉にもとづいて博士が建てられた家です。永井博士は、当時長崎医科大学の助教授でしたが、被爆により自ら白血病となり、余命3年と診断されながらも傷病者の治療活動を続け、その間に、「原爆報告書」をまとめ、映画化されましたが、「長崎の鐘」を執筆し、その他、数多くの著書を著し、被爆した人々の苦悩を貴重な証言として書き残されました。

次は永井博士の著書のひとつである「この子を残して」の一節です。



うとうとしていたら、いつの間に遊びから帰ってきたのか、カヤノが冷たいほほを私のほほにくっつけ、しばらくしてから、

「ああ、……お父さんのにおい……」
と言った。

この子を残して…この世をやがて私は去らねばならぬのか！

母のにおいを忘れたゆえ、せめて父のにおいなりとも、と恋しがり、私の眠りを見定めてこっそり近寄るおさな心のいじらしさ。戦の火に母を奪われ、父の命はようやくとりとめたものの、それさえ間もなく失わねばならぬ運命をこの子は知っているのであろうか？

枯れ木すら倒るるまでは、その幹のうつろに小鳥をやどらせ、雨風をしのがせるという。重くなりゆく病の床に全くの廃人となり果てて寝たきりの私であっても、まだ息だけでも通っておれば、この幼子にとっては、依るべき大木のかげと頼まれているのであろう。けれども、私の身体がとうとうこの世から消えた日、この子は墓から帰ってきて、この部屋のどこに座り、だれに向かって、何を訴えるのであろうか？

私の布団を押入からひきずり出し、まだ残っている父のにおいの中に顔をうずめ、まだ生え変わらぬ奥歯をかみしめ、泣きじゃくりながら、いつしか父と母とともに遊ぶ夢のわが家に帰りゆくであろうか？

夕日のかっと射し込んでだっ広くなったその日のこの部屋のひっそりとした有様が目に見えるようだ。私のおらなくなった日を思えば、なかなか死にきれないという気にもなる。せめてこの子がモンペりのボタンをひとりではめることのできるようになるまで…なりとも…。

このような悲しみを繰り返さないためにも、平和の尊さ、大切さを心に刻み、平和な世界を築く努力をしていかなければと思います。 【参考文献】人権教育講話集上山勝著（学事出版）

裏面の詩「ヒロシマの空」もお読み下さい。

ヒロシマの空

林 幸子

夜野宿してやっと避難さきにたどりついたらお父ちゃんだけしかいなかった
…お母ちゃんとユウちゃんが死んだよお…

八月の太陽は前を流れる八幡河に反射して父とわたしの泣く声をさえぎった
そのあくる日

父はからの菓子箱をさげわたしは鍬をかついでヒロシマの焼け跡へとぼとぼあ
るいていった

やっとたどりついたヒロシマは死人を焼く匂いにみちていた

それはサンマを焼くにおい

燃えさしの鉄橋をよたよた渡るお父ちゃんとわたし

昨日よりもたくさんの死骸真夏の熱気にさらされ体がぼうちょうしてはみだす

内臓渦巻く腸

かすかな音をたてながらどすぐろいきいろい汁が鼻から口から耳から目からとけて流れる

あああそこに土蔵の石垣がみえるなつかしいわたしの家の跡 井戸の中に燃えかけの包丁が浮いていた
台所のあとにお釜がころがり六日の朝たべたカボチャの代用食がこげついていた

茶碗のかけらがちらばっている

瓦の中へ鍬をうちこむとはねかえる お父ちゃんは瓦のうえにしゃがむと手でそれをのけはじめた
ぐったりとしたお父ちゃんはかぼそい声で指さした

わたしは鍬をなげすててそこを掘る 陽にさらされて熱くなった瓦だまって一心に掘りかえす父とわたし
ああお母ちゃんの骨だ

ああぎゅっとにぎりしめると白い粉が風に舞う お母ちゃんの骨は口に入れるとさみしい味がする
たえがたいかなしみがのこされた父とわたしに襲いかかって

大きな声をあげながらふたりは骨をひらう

菓子箱に入れた骨はかさかさと音をたてる

弟はお母ちゃんのすぐそばで半分骨になり内臓が燃えきらないでころりところがっていた

その内臓にフトンの綿がこびりついていて…死んでしまいたい！

お父ちゃんは叫びながら弟の内臓をだいて泣く

焼け跡には鉄管がつきあげ噴水のようにふきあげる水が

あの時のこされた唯一の生命のように太陽の光をあびる

わたしはひびの入った湯呑み茶わんに水をくむと弟の内臓の
前においた 父は配給のカンパンをだした

わたしはじっと目をつむる

お父ちゃんは生き埋めにされたふたりの声を聞きながらどう
しようもなかったのだ

それからしばらくして無傷だったお父ちゃんの体に斑点がひ
ろがってきた

生きる希望もないお父ちゃん

それでものこされるわたしがかわいそうだとほしくもない食べ物を喉にとおす

…ブドウが食べたいなあ キウリでがまんしてね

それは九月一日の朝 わたしはキウリをしぼりお砂糖を入れてジュースをつくった

お父ちゃんは生きかえたようだと言われ泣いていたけれど泣いているようなよわよわしい声

ふとお父ちゃんは虚空を見つめ…風がひどい嵐がくる…嵐がといった

ふーっと大きく息をついた そのままがっくりとくずれてうごかなくなった

ひと月もたたぬまにわたしはひとりぼっちになってしまった

涙を流しきったあとの焦点のないわたしのからだ

前を流れる河をみつめる

美しく晴れわたった

ヒロシマのあおい空

